

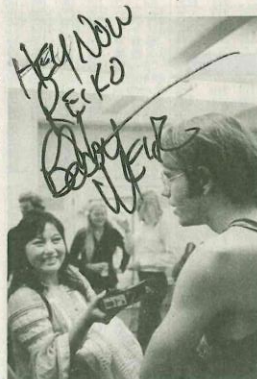


1960年代後半、ラジオのレギュラー番組を10本ほど持つようになり、海外取材に飛び回っていました。アメリカでは「花のサンフランシスコ」が大ヒットして、自然回帰と人間性回復を唱えるヒッピー文化が盛り上がっていました。

▲69年8月、米ニューヨーク州で開かれたロック中心の野外コンサート「ウッドストック・フェスティバル」は、愛と平和を求めるヒッピー時代の象徴だった▼

ベトナム戦争を巡る反戦運動は日本にも飛び火し、音楽の世界にも変化が表れました。「反体制ロックでなければ音楽にあらず」と

音楽は愛 ゆかわ 湯川 れい子 14



1967年、ヒッピー文化を代表する「グレイト・フル・バンド」に、米サンフランシスコでデビュー（湯川さん提供）

「引退」エルビス復活で撤回

いった風潮が広がり、音楽評論も理論武装に終始して窮屈な内容になっていきました。ロック集会と呼ばれて、「エルビス・プレスリーという存在があったから、ロックンロールはここまで爆発できた」と発言すると、「エルビスがロックだなんて冗談じゃない」と、糾弾されました。

日本のロックはビートルズから始まっていたので、ビートルズがいかにエルビスの影響を受けたかなど、それ以前の歴史を全然知ら

ないんですね。私が心から聴きたい楽曲について語れないのであれば、音楽を伝える喜びも感じられなくなりました。

21歳の時に形だけの結婚をした相手との離婚が成立し、30歳を過ぎた頃です。結婚願望はなかったけれど、なぜか子供だけは欲しかった。明け方まで原稿を書き、疲れ果ててベッドにもぐり込む生活で一生が終わると思うと、虚しくなりました。それで69年、ラジオも雑誌連載もすべてやめ

る決意をします。「さようなら湯川れい子さん」という、聴取者約500人が参加したラジオの公開録音番組で、引退宣言をするんです。

時間ができたので、思い切って、フィリピンで戦死した長兄の遺骨を捜しに出かけました。いつか詣でようと思っていた旅です。手がかりは、戦時中の情報統制で墨塗りにされた兄からの一枚のハガキ。ルソン島北部のサブランで、当時の日本兵を知る現地の人から話を聞くことができました。遺骨は見つかりませんでした。遺骨は、恐らく兄が身を潜めていたであろう洞窟を捜し出し、お線香やタバコを供えました。

帰国してしばらく、自宅

でしたが、ある時、状況が一変します。大好きなエルビス・プレスリーが、長期の映画契約の拘束を解かれ、アメリカでコンサート活動を再開したとのニュースが伝わってきたのです。70年、ラスベガスに専用ライブスペースができ、そこでの記録映像は映画「エルビス・オン・ステージ」にまとめられ、71年に日本でも大ヒットしました。

「湯川さん、エルビスを語れるのは、あなたしかいない」と、各方面から声がかかり、いつの間にかズルズルと引き戻されてしまつて……。ビートルズが大暴れた後、30代半ばのエルビスがステージに戻って来るとは思いもかけませんでした。あの時エルビスが復活していなかったら、今の私はなかったと思います。

（編集委員 永峰好美）